

平成28年6月

美しい決算書、美しい会社

古田土会計では、「利益とは、社員と家族を守るためのコストであり、会社存続のための事業存続費である。」と定義しています。また「利益とは、全社員の創造性の総和である。利益を出すことは美しいこと。全社員の努力と知恵のたまもの。正しく、誠実に商売して利益を出すことは誇りである。」とも定義しています。本業で出した利益は営業利益で表示されますが、本業以外の利益は、営業外収益や特別利益で表示されます。美しい損益計算書は、営業利益が多く、税引前利益の少ない会社です。反対に美しくない損益計算書は、営業損失で税引前利益が多く出ていて、税額の多い会社です。美しい決算書を作ると銀行の格付けが上がり、低い利率で資金の調達ができます。ただし、いくら営業利益が多くても、仕入先に毎年値下げ要求をした、人件費を下げるために正社員を減らして派遣社員を増やしている大企業や税率の低い国に子会社を設立してそこで利益を出し、受取配当金の益金不算入を利用して表面上は経常利益や税引後利益を多くして、税金をほとんど払っていない大企業の決算書も美しいとは言えません。美しい貸借対照表とは、預金が多くて借入金の少ない会社です。そして勘定科目の少ない会社です。具体的には、受取形はなりほじがよい、売掛金、棚卸資産は少ないほうがよい、売上高を一定とすると、売掛金や棚卸資産が少ないということは回転期間が短かく、効率的な経営をしているということです。逆にこの金額が多いと短期借入金等により資金調達しますが、総資産、総負債は膨張します。次に立替金、仮払金等のその他の流動資産はゼロにする。土地建物等の固定資産は社長が個人で持つか、不動産管理会社を設立して売却し、借入金を返済。機械装置等で特別償却できるものは活用し、簿価を低くする。本業に関係ない投資目的の有価証券は売却し、借入金を減らす。固定資産は可能な限り圧縮して、預金を増やすが、借入金を減らすことです。負債の部では、支払形はなく、借入金は短期借入金を減らして長期借入金を増やす。長期借入金の返済は可能な限り長くして、月々の返済額を少なくして、現金を貯める。

美しい会社とは、社員が礼儀正しく、環境整備の行き届いている会社、よつ限の会社です。具体的には、社長が公私混同しないこと、坪添東京都知事がいたのでは社長の言うことを社員は聞きません。社長の年齢が若いこと、理想は40代です。40代が体力、気力、経験と充実しているのが世の中の環境変化に迅速に対応できるのではないかと考えています。社員が生活のためにはなく、会社の理念に沿って世のため、人のために生き生きと働いている会社です。美しい会社の定義は各社様々であると思います。問題なのは、きれいな事を言うなと言って何も(ないこと、例外事項を出して批判すること)です。6月6日にワールドビジネスサテライト(WBS)の「カイシャの鑑」というコーナーに古田土会計が出演し、私は90分位大塚キャスターのインタビューを受けました。一番最後に聞かれたのは、入口に大きく書いてある「日本中の中小企業を元気にする」という我々の使命感が、本当に実現できているのびすかと聞かれ、私は「実現できるかどうかはわかりませんが、でもそのお志(こころがし)で仕事をしています」と答えました。

古田土 満